日英語の視点の違いを取り入れた文法指導案

篠﨑亮哉

1. 研究の背景と目的

日本の中等教育において、英語の文法学習はしばしば避けられがちなトピックである（秋田, 2019, p. 290）。この現状は、生徒の文法学習に対する関心が低く、その理解が限られていることに起因している。高校 1 年生のうち、基本的な英語文法を習得しているのはわずか 10%であり、約 90%の生徒が英単語や文法を「覚える」ことができないために英語が苦手だと感じている（田村, 2009）。このような背景を踏まえ、本研究の目的は以下の三点にある。第一に、文法学習の質と理解を向上させること。第二に、学生が母語を用いて対象言語を分析することにより、創造的な文法学習を促進すること。第三に、他の言語の学習にも応用可能な文法ルールの習得を促すことである。

この目的を達成するために、本研究では、日本語と英語の「construal（捉え方）」の違いに注目し、その違いを克服するための授業計画を提案する。

2. 先行研究

認知言語学の観点から、池上（2016）は、話し手が自分の視点から状況を解釈する「主観的な捉え方」と、話し手が状況の外からそれを把握する「客観的な捉え方」の違いを示している。これに対して、第二言語習得論の観点から、白畑（2015）は日本語と比較して教えるべき主な文法事項として、自動詞と他動詞の区別、時制・相、分詞の形容詞的用法、関係代名詞節と被害受け身、主語と主題の相違を挙げている。

また、文法学習/教育の観点から、Littlemore（2009）は、言語の一部は恣意的ではなく、意味の背後には理由があると指摘している。教師は生徒に表現の意味を説明し、単なる暗記ではなく理解を促すべきであり、これにより深い学習と長期的な記憶の形成が期待できると述べている（Craig & Lockhart, 1982）。

3. 文法指導案の提案

本研究の指導案は、日本語と英語の捉え方の違いを理解することを目的としている。使用する主な教材は、川端康成の小説『雪国』の日本語原文と英訳である。授業のアプローチとして、英語の文を捉え方の違いに注目して正しい順序に並べる活動や、英訳から日本語訳を作成し、原文と比較する活動を行う。

まず、導入として以下の日本語文を英語に翻訳する課題を設定する。「ここはどこですか？」と「彼女はどこですか？」である。予想される回答はそれぞれ Where am I?と Where is she?である。ペアで翻訳の類似点と相違点を話し合うことで、日本語と英語の主語の違いに注目させる。この活動を通じて、日本語が主語を省略することが単に明らかな話者を示すためではなく、捉え方の違いによるものであることを理解させる。日本語は主観的な捉え方を好む言語であり、話し手が自分の目で見たシーンを表現することが多いのである。

次に、与えられた英単語を正しい順序に並べる活動を行う。この活動の目的は、文の主語と英語の話者が好む構築に注意する能力を向上させることである。例えば、「[we / came / the / out of / the train / long / through / tunnel / into] the snow country.」という単語を並べ替えて、The train came out of the long tunnel into the snow country.という正しい文を作成する。

さらに、日本語訳の比較活動では、学生が 2 つの日本語文の主語の違いに注目し、翻訳の自然さと構築に注意しながら元のテキストと比較する。例えば、英語文 The train came out of the long tunnel into the snow country.を日本語に翻訳し、「列車は長いトンネルから雪国へと出てきた。」と比較する。このようにして、英語と日本語の捉え方の違いを具体的に理解させる。

これらの活動を通じて、学生は英語と日本語の捉え方の違いを認識し、文法学習の質と理解を深めることが期待される。

4. 研究内容のまとめと将来の展望

本研究では、日本語と英語の視点の違いに着目した文法指導案を提案した。この指導案を通じて、視点の違いに注目した文法学習が生徒の理解を深める可能性があることが示された。将来的には、認知言語学の応用を取り入れたレッスンプランの拡充を目指し、特に高等学校での実践を通じてアプローチの効果と対象の検証を行う予定である。

5. 主な参考文献

・秋田喜代美・斎藤兆史・藤江康彦(編). (2019). 『メタ文法能力を育てる文法授業ー英語科と国語科の連携』. ひつじ書房.

・Ikegami, Y. (2016). Subject-object contrast and subject-object merger in 'thinking for speaking': A typology of the speaker's preferred stances of construal across languages and its implications for language teaching, Cognitive-functional approaches to the study of Japanese as second language, 301-318.

・Littlemore, J. (2009). Applying Cognitive Linguistics to Second Language Learning and Teaching. Palgrave Macmillan.

・Shirahata, T. (2015). Who's afraid of grammatical errors?, 大修館書店.

・Tamura, S. (2009). Looking into factors contributing to the diminishing basic English grammar competency of students and their disinterest in the subject, Research reports Kushiro National College of Technology 43, 75-79.